

村上春樹『神の子どもたちはみな踊る』論

— 「暴力性」と「地下性」について —

葉 凌

1. はじめに

『神の子どもたちはみな踊る』（新潮社、2000年2月）は、『新潮』の1999年8月号から12月号に連載された五編の短編小説に、書き下ろしの一編を加えた短編小説集である。「連作『地震の後で』」と題され、五回にわたって『新潮』に掲載された各編のタイトルは、「UFOが釧路に降りる」、「アイロンのある風景」、「神の子どもたちはみな踊る」、「タイランド」、「かえるくん、東京を救う」である。単行本化される際に、書き下ろしの「蜂蜜パイ」が加えられ、作品の題名が『神の子どもたちはみな踊る』に変更された。単行本で題名が変わったにも関わらず、初出を記すページに「蜂蜜パイ」が「連作『地震の後で』その六」と題されて、他の五編の続きとして扱われている。つまり、『神の子どもたちはみな踊る』における六編は連作と見なしてよい。

「地震の後で」という題名があった一方、六編はいずれも直接地震に関連した物語ではなく、被災地から遠く離れた場所（釧路、茨城、千葉、タイ、東京など）で1995年2月に起きた出来事である。1995年2月という設定について、村上春樹は次のように述べている。

つまり1995年2月というのはそのふたつの大事件にはさみこまれた月なのだ。不安定な、そして不吉な月だ。僕はその時期に人々がどこで何を考え、どんなことをしていたのか、そういう物語を書きたかった。地震の様々な余波を受け、来るべきサリンガス事件の（無意識的）予感の重みを抱えて生きる人々の姿。¹⁾

1995年2月というのは、1995年1月の阪神淡路大震災と同年3月の地下鉄サリン事件に挟まれた月である。こうして、1995年2月と設定される『神の子どもたちはみな踊る』は、阪神淡路大震災を描くものではなく、震災とサリン事件を繋ぐ通路と見ても差し支えないだろう。そして、舞台の設定について、村上春樹は以下のように説明している。

僕は神戸の地震についてノンフィクションを書きたいという気持ちには、どうしてもなれなかった。そこは僕が少年時代を送った思い出の深い場所であるし、たくさんの知り合いもいる。（中略）その地震がもたらしたものを、できるだけ象徴的なかたちで描くことにしよう。その出来事の本質を様々な「べつなもの」に託して語る。²⁾

周知のように、村上春樹は地下鉄サリン事件について、一年に一冊のペースで二冊のノンフィク

ジョン、『アンダーグラウンド』（講談社、1997年3月）と『約束された場所で』（文藝春秋、1998年11月）を上梓している。しかし、翌年（1999年）に連載された「連作『地震の後で』」はノンフィクションという手法で阪神淡路大震災を記録するものではない。それは、被災地の神戸は村上春樹が思い出の深い故郷だという所以である。使用した方法が異なっているが、結果的に三年間（「連作『地震の後で』」の連載は1999年）、村上春樹は1995年に日本社会を震撼させた二つの出来事を文字化している。なぜそれほど時間や精力を費やしてまで二つの出来事を追求したのか、村上春樹の以下のような発言は示唆的である。

そのふたつのあいだには大きな違いがある。しかしその両者は決して無縁なものではない。（中略）それらの出来事は、言うなれば地下から、我々の足下深くから、やってきたものだ。（中略）そのような執拗なまでの「地下性」は、僕にはただの偶然の一致とは思えなかった。³⁾

「地下」は一つのキーワードとして、二つの出来事を繋ぐものである。しかも、それはただの偶然にとどまらないものと見られている。また、村上春樹の紀行文『辺境・近境』（新潮社、1998年4月）に収録された「神戸まで歩く」に二つの出来事の繋がりに関する記述が見られる。

現在のこの神戸という地域だけを切り取ってみても、ひとつの暴力が、もうひとつの別の暴力に宿命的に（現実的に、あるいは比喩的に）しっかりと繋がっているように、僕には感じられる。そこには何か時代的な必然性があるのだろうか？ それともあくまでただの偶然の一致にすぎないのだろうか？⁴⁾

繋がっている二つの暴力とは、阪神淡路大震災と地下鉄サリン事件を指している。村上春樹はこの二つの事件に「偶然の一致」を超越した必然性を感じ取っているようである。こうして、「暴力」はもう一つのキーワードとして、二つの出来事の関連性を表している。

以上のように、「地下」や「暴力」において、阪神淡路大震災と地下鉄サリン事件とは決して別々のものではなく、連続した出来事と見られる。本稿では、二つの出来事を繋ぐ通路としての『神の子どもたちはみな踊る』は、どのようにその「暴力性」と「地下性」を表現しているか、震災の被害者ではない主人公たちがどのように地震に関わっているか、そうした問題を明らかにしてみたい。

2. 圧倒的な暴力

『神の子どもたちはみな踊る』で地震の暴力は直接描かれませんが、地震を想起させる場面はいくつか見られる。

まず、一作目の「UFOが釧路に降りる」で、主人公の小村は地震の五日後に妻の姿が消えてしまう。彼女は「銀行や病院のビルが崩れ、商店街が炎に焼かれ、鉄道や高速道路が切断された風景」（p107）を映すテレビニュースを五日間見て、「もう二度とここに戻ってくるつもりはない」（p109）と書き残して実家に帰ってしまうのである。それで、離婚を承諾した小村はしばらく休暇をとる。彼は同僚の佐々木に北海道の釧路にいる妹のケイコに「小さな荷物」を直接渡してほしいと頼まれる。それに同意した小村は釧路に行って、ケイコと彼女の友人・シマオという女性に出会う。しかし、その「小

包」に何が入っているか、作中には明白に示されていない。「小包」の中身について、シマオは次のように冗談を言う。

小村さんの中身が、あの箱の中に入っていたからよ。小村さんはそのことを知らずに、ここまで運んできて、自分の手で佐々木さんに渡しちゃったのよ。だからもう小村さんの中身は戻ってこない。(p127)

シマオの冗談を聞いた小村は、「自分が圧倒的な暴力の瀬戸際に立っていることに思い当たった」(p127)という。箱に入れられた小村の中身は、狭いところに閉じこめられる地震の被害者を連想させる。また、「圧倒的な暴力」という言葉は、「その二つの出来事(阪神淡路大震災と地下鉄サリン事件・論者注)に共通してある要素をひとつだけあげると言われれば、それは『圧倒的な暴力』と言うことになるだろう」⁵⁾という『アンダーグラウンド』の一文を想起させ、地震とサリン事件との関わりを示す言葉にほかならない。最初に、地震の記事を読んだ小村は、「それらのディテイルは妙に平板で、奥行きを持たないものに映った。すべての響きは遠く単調だった」(p113)という。しかし、自分の中身が箱に入れられたというシマオの冗談を聞いた小村は、ようやく地震の「圧倒的な暴力」に気づく。

小村は結婚して以来、「夜には安らかな眠りを楽しむことができた。以前のように奇妙な夢に眠りを乱されることもなくなった」(p108)という。また、「明日地震が起きるかもしれない。(中略)何が起こるか、そんなの誰にもわからないのよ」(p124)という台詞は小村の未来への不安を示している。一見地震は彼の人生を乱して不安をもたらすが、実は小村家には既に不和が存在している。例えば、妻と神戸との関係について「小村の知る限りでは、神戸近郊には親戚も知り合いも一人もいなかった」(p107)と書かれているが、実際は明白ではない。そして、地震と妻の家出との関連性について聞かれて「たぶんないと思う」と答える小村は、「どっかにつながっているじゃないかな(中略)あなたにわからないだけで」(p118)と反論される。以上の例から分かるように、小村は自分の妻について多く知らないのである。また、「しばらく実家に戻っているという書き置きがキッチンテーブルにのこされていることが、これまでも何度かあった。そんなときにも小村は文句ひとつ言わなかった。ただ黙って彼女の帰りを待っていた」(p109)という例から分かるように、小村と妻とのコミュニケーションは決して充分になされているとは言えない。ほかに、「勃起は硬く、セックスは親密だった」(p108)が、小村と妻の最後のセックスは「去年の十二月の末」(p124)で、妻の家出である1月22日(地震の五日後)まで、三週間も空いている。それは夫婦間のコミュニケーションの不在と見なされる。

地震をきっかけとして、小村は離婚することになる。地震は家庭を崩壊させる契機だと言えよう。「奥さんがつい最近亡くなられた」(p113)というケイコの台詞は、小村の妻の象徴的な死を示して、古い家族関係の終りを表すものだと考えられる。また、ホテルでシマオが口にする台詞「でも、まだ始まったばかりなのよ」(p127)で本作が終わるように、未知の土地である釧路に行ったりケイコとシマオに出会ったりする小村は、新しい人間関係が始まったばかりである。さらに、松本常彦が「ラブホテルが現代において『家族』の起源となる空間」⁶⁾と提示しているように、シマオとホテルに行った小村は新しい家族作りも始めたばかりであろう。このように、地震がもたらした「圧倒的な暴力」

は旧い家族関係の終りとともに新しい人間関係を作り出す象徴だと考えられる。

次に、二作目の「アイロンのある風景」の「暴力性」を見てみよう。関西弁を操る三宅という40代後半で神戸出身の人物が登場する。彼は地震がまだ起きていなかった「思い出せないくらいずっと昔」(p146)から「冷蔵庫の中に閉じこめられて死ぬ」(p145)夢を見ている。彼の夢は以下の通りである。

狭いところで、真っ暗な中で、ちょっとずつちよつとずつ死んでいくんや。それもうまいことすつと窒息できたらええけどな、そう簡単にはいかん。(中略)死ぬまでにもものすごい長い時間がかかる。声を上げて誰にも聞こえへん。誰も俺のことに気づいてもくれん。身動きもできんくらい狭いところや。どんなにあがいても内側からドアは開かへん。(p145)

暗くて狭い冷蔵庫に閉じこめられて、誰も自分のことに気づいてくれない恐怖は、まさに地震で倒れた建物に埋められた人が体験するものである。地震の暴力を想起させる夢である。しかし、それは1995年の阪神淡路大震災とは直接関連するものではなく、ずっと昔から見ている夢である。神戸にいる妻と二人の子供を捨て、茨城に住み着いた三宅は、震災の後でも神戸に戻ろうとしない。さらに、「三宅さん、出身は神戸のほうだっていつか言っていましたよね(中略)先月の地震は大丈夫だったんですか?神戸に家族とかいなかったんですか?」(p136)と聞かれても、「さあ、ようわからん。俺な、あっちとはもう関係ないねん」(p136)と答えて、家族に関する話題を避けている。

一方、三宅は焚き火をするのが得意である。それをきっかけとして順子という女性は三宅と「焚き火フレンド」(p142)になる。三宅がした焚き火をみる順子は「そこにある炎は、あらゆるものを黙々と受け入れ、呑みこみ、赦していくみたいに見えた。本当の家族というのはきっとこういうものなのだろう」(p137)と考えた。「父親の顔を見ることにも耐えられなかった」(p138)と書かれているように、順子は父親との関係がうまくいかず高校三年生の時に家出をする。彼女は三宅がした焚き火に「何かをふと感じることになった。何か深いものだった」(p141)という。故郷や家族を捨てた二人が焚き火を通して感じた「何か」を考える際に、「焚き火が失われた『家族』関係の代理的補償である⁷⁾」という論点は示唆的である。焚き火は赤の他人を集めて「家族」に近い人間関係を作るものである。順子が焚き火に感じた「何か」とは彼女が父親に感じなかった「父性」だと考えられる。しかし、それはいつまでも続けられるものではない。「焚き火が消えたら、寒くなつていやでも目は覚める」(p150)と傍点で強調されているように、いつか焚き火が作り上げた「代理的な家族関係」から目が覚めないわけにはいかない。

そして、地震の夢を話題にした後、三宅が「死に方から逆に導かれる生き方というものもある」(p147)と順子に言って、二人は「死」について話し合う。そして、三宅に「今から俺と一緒に死ぬか?」(p149)と聞かれる順子は、「三宅さんの腕に抱かれているうちに、だんだん眠くなってきた(中略)束の間の、しかし深い眠りに落ちた」(p150)。地震の話題の後で眠りにつくのは死の象徴だと思われる。家族が破綻した二人は焚き火によって「代理的家族」を作り上げる。しかし、地震を話題にした二人は、いやでも焚き火から目覚めるしかないと悟る。眠りは象徴的な死として旧い人間関係の終りだと思なされる。さらに、それは人生の新しい段階に向かう始まりだと言えよう。

また、六作目「蜂蜜パイ」にも暴力的な夢が描かれている。それは沙羅という四歳の女の子の夢で

ある。彼女の夢は以下のように説明されている。

沙羅は、知らないおじさんが自分のことを起こしに来るんだっていうの。それは地震男なの。その男が沙羅を起こしに来て、小さな箱の中に入れてようとするの。とても人が入れるような大きさの箱じゃないんだけど。それで沙羅が入りたくないというと、手を引っ張って、ぼきぼきと関節を折るみたいにして、むりに押し込めようとする。そこで沙羅は悲鳴を上げて目を覚ますの。(p229)

三宅の夢と共通しているのは、地震の被害者が狭いところに閉じこめられる状態である。「ぼきぼきと関節を折る」という描写があるように、三宅より彼女の夢はさらに暴力的に見える。沙羅がそんな夢を見たのは「神戸の地震のニュースを見すぎたせいだ」(p229)と母親の小夜子は考える。「地震男」の夢を見た沙羅は、淳平が即席で考えた童話的な「熊のまさきち」の話をして聞かせてようやく眠りにつくのである。淳平は沙羅の父親である高槻の大学時代以来の親友である。高槻と小夜子が離婚した後、淳平は高槻の代わりに沙羅親子の面倒を見ている。そして、「沙羅は高槻を『パパ』と呼び、淳平を『ジュンちゃん』と呼んだ。四人は奇妙な疑似家族を作り上げた」(p243)というように、四人が週に一度「疑似家族」として食事をすることは夫婦が離婚した後も続いている。沙羅が高槻をパパと呼んでいるものの、「高槻がいなくて食卓はとたんに静かになり、不思議なくらい日常的になった。知らない人が居合わせたら、間違いなく本物の家族だと思っただろう」(p245)と書かれる。こうして、沙羅の継父ではなくても、淳平は「娘の名付け親」(p241)として、既に「父の身代わり」をしている。

また、「アイロンのある風景」の三宅と同じように、兵庫生まれの淳平は地震の後でも「実家に電話をかけなかった(中略)地震の話題が出ると、口をつぐんだ」(p247)とあるように、故郷を捨てた人である。淳平は「崩壊した市街地と立ちのぼる黒煙が映し出されていた。まるで爆撃のあとのよう」(p246)になった故郷やそこにいる両親を顧みず、小夜子と沙羅との「疑似家族」を続けている。昔からずっと小夜子愛している淳平は、離婚している小夜子と再婚するか「疑似家族」を続けるか、なかなか決心がつかない。そして、「彼は迷い続けた。結論は出なかった。そして地震がやってき」(p246)て、沙羅が「地震男」の夢を見た後、小夜子に「すぐに結婚を申し込もう。淳平はそう心を決めた。もう迷いはない。これ以上一刻も無駄にはできない」(p254)と考える。それは「アイロンのある風景」と同じように地震の「暴力性」を契機とする古い関係の消滅と新しい家族の始まりだと見なされよう。

一方、「二人の女を護らなくてはならない。相手が誰であろうと、わけのわからない箱に入れさせたりはしない。たとえ空が落ちてきても、大地が音を立てて裂けても」(p255)と思う淳平は、新しい家族関係に向き合う前向きな姿勢を見せている。また、沙羅に話して聞かせた「熊のまさきち」の話が「かわいそうな」(p250)方向に傾くとき、「もっとうまいやかたはなかったの？ みんなが幸福に暮らしましたというような」(p250)と聞かれた淳平は、「まだ思いつかないんだ」(p250)と答える。しかし、小夜子との結婚を決めて二人を守ろうと考えた淳平は、「漠然としたアイデアが彼の頭の中に芽を出し、少しずつ具体的なかたちをと」(p255)るにいたる。そして、それは沙羅が喜ぶ「新しい結末」(p255)になるだろうと淳平は思う。沙羅の見た「地震男」の夢を契機として淳平は小夜

子と結婚しようと決心する。それは、沙羅の夢に「疑似家族」を終わらせて新しい家族関係を促す力がこめられていると考えられる。以上のように、「蜂蜜パイ」が「アイロンのある風景」と同じように、地震の暴力を想起させる夢は古い関係の消滅と新生の到来を意味するものだと言えよう。

以上の三つの短編における「暴力」はいずれも阪神淡路大震災に直接関連するものではない。しかし、神戸周辺に壊滅的な打撃をもたらした地震は、小村、三宅、淳平などのような東京周辺に住む人々の心の奥にまで影響を及ぼす。地震という地下に潜むエネルギーは、人間社会に災害を加えるものだけではなくて、人間の内面と響き合うものでもある。地震の「暴力性」は古い人間関係を壊して家族の新生を促す力にもなっている。

3. 地下のエネルギー

前述したように、地震の破壊的なエネルギーは人間の内面の暴力性と響き合っている。次に、「地下性」に注目しながら地震と人間との関連性について考察してみよう。

三作目の「神の子どもたちはみな踊る」は「踊り」を通して地震と人間の心との繋がりを示している。「踊り」に関する場面は以下の二箇所である。

音楽に合わせて無心に身体を動かしていると、自分の身体の中にある自然な律動が、世界の基本的な律動と連帯し呼応しているのだというたしかな実感があつた。潮の満干や、野原を舞う風や、星の運行や、そういうものは決して自分と無縁のところでおこなわれているわけではないのだ、善也はそう思った。(p169)

それからふと、自分が踏みしめている大地の底に存在するもののことを思った。そこには深い闇の不吉な低鳴りがあり、欲望を運ぶ人知れぬ暗流があり、ぬるぬるとした虫たちの蠢きがあり、都市を瓦礫の山に変えてしまう地震の巣がある。それらもまた地中の律動を作り出しているものの一員なのだ。(p170)

主人公の善也は踊りながら自分の身体の中に存在する律動と地球の律動との連帯や呼応を実感している。そして、しばらく踊ると、地震が地球の律動の一部だとも思っている。善也は、地震が自分の一部として人間の身体の中に存在していることを考える。このように、地下にこもる地震を起こす地球のエネルギーが人間の心の深層に潜む力に繋がることは、善也の踊りを通して表現されている。

では、善也の心に潜んでいる力はどんなものであろうか。善也が踊り始めたのは、霞ヶ関駅で自分の父らしき人物を見かけて彼を尾行して失敗したあとである。「僕が追い回していたのはたぶん、僕自身が抱えている暗闇の尻尾のようなものだったんだ」(p168) とあるように、善也の心の中に父親への渴望が見られる。善也が父親への渴望の原因について、次の一節は示唆的である。

善也には父親がいない。生まれたときから、彼には母親しかいなかった。善也のお父さんは『お方』(彼らは自分たちの神をそういう名で呼んだ)なんだよ、と母親は小さい頃から彼に繰り返し言い聞かせていた。『お方』だからお空の上にはいかられないの。私たちといっしょに住むことはできない。(p156)

善也は、母親がある宗教団体の信者であり、父親がその宗教団体の「神」だと言われ、自分が「神の子ども」と扱われる。父親の不在が子どもに対する影響は言うまでもない。「彼は夜寝る前に、父親である神にお祈りをした。(中略)もし本当に神様が父親であるなら、それくらいの願いは聞き入れてくれてもいいはずだった」(p158)と、小学校に入った善也は父親との交流を試みる。しかし、父親が善也との交流を拒否するように、彼の願いは一度も叶ったことはない。そして、「いちばん根本的な部分で、善也を決定的に信仰から遠ざけたのは、父なるものの限りない冷ややかさだった。暗くて重い、沈黙する石の心だった」(p163)と、中学校にあがった善也は自ら父親との繋がりを切るのである。信仰を捨てて父である神を離れる一方、25歳になった善也は、父らしき人物を目撃すると「迷いもなく、あとをついていた」(p155)のである。父への愛憎に悩まされた善也の心の葛藤は彼の内面の力だと考えられる。

霞ヶ関駅と言えば、地下鉄サリン事件を想起させる。また、「中央線で四ッ谷まで行き、そこで丸ノ内線に乗り換え、霞ヶ関まで行って日比谷線に再び乗り換え、神谷町駅で降りた」(p155)とあるように、「神の子どもたちはみな踊る」で羅列された地下鉄に関わる固有名詞は、全て『アンダーグラウンド』でなじみのある場所である。「オウム真理教団の五人の『実行者』たちが、尖らせた傘の先端でサリン入りのポリ袋を突き破ったとき、彼らはまさにその『やみくろ』たちの群を、東京の地下に、その深い闇の世界に解き放った」⁸⁾と同じように、善也の父への葛藤は東京の地下で解放される。

本作の最後の場面で、「僕らの心は石ではないのです。石はいつか崩れ落ちるかもしれない。姿かたちを失うかもしれない。でも心は崩れません。僕らはそのかたちなきものを、善きものであれ、悪しきものであれ、どこまでも伝えあうことができるのです」(p172)という「石」に関する記述があって、それは善也の父である「神」の「暗くて重い、沈黙する石の心」に呼応している。「石」に喩えられる「神」とは違って、人間の心が孕む力は、善と悪と両義的に捉えられるものである。それは前述した地震の暴力性に一致しているのではなからうか。

また、四作目の「タイランド」にも地震と人間の心との連続性が見られる。それは、「そのためには心の底では地震さえをも望んだ。ある意味では、あの地震を引き起こしたのは私だったのだ」(p192)という箇所である。地震を望むのは主人公のさつきである。中年女性のさつきは甲状腺の専門医であり、1995年2月に世界甲状腺会議のためタイにいる。先月の阪神淡路大震災を自分が起こしたものとして、彼女は捉らえている。なぜ彼女は地震を望むかという、次のような一節に説明される。

あの男が重くて固い何かの下敷きになって、ペしゃんこにつぶれていればいいのにと彼女は思った。あるいはどこどろに液体化した大地の中に飲み込まれていればいいのに。それこそが私が長いあいだ望んできたことなのだ。(p182)

さつきが地震を望むのは、「あの男」の死を望むことに由来するものである。京都出身のさつきは、タイ人のガイド兼運転手のニミットに「先月の神戸の大地震ではたくさんの方が亡くなりました。(中略)ドクターのお知り合いには、神戸に住んでおられる方はいらっしゃいませんか？」(p181)と聞かれたとき、「いいえ。神戸には私の知り合いは一人も住んでいない」(p181)と答える。しかし、

「その男が神戸に住んでいることを彼女は知っていた。自宅の住所も電話番号も知っていた」(p184) ように、さつきの返答は事実ではない。さつきと「あの男」との関係について、以下のように書かれている。

家がペしゃんこにつぶれていればいいのにと彼女は思った。一家が一文無しで路頭に迷っていただければいいのに。あなたが私の人生に対してしたことを思えば、私の生まれるはずだった子どもたちに対してしたことを思えば、それくらいの報いがあるって当然ではないか。(p192)

作中に「あの男」についての情報は多く語られていない。ただ、さつきから母親になる可能性を奪った男だと確定できる。「あの男」への憎しみによって、さつきは彼の死を望む。神戸に住んでいる「あの男」の死を望むからこそ、自分が地震を起こしたとさつきは考える。それは、心に抱える「あの男」への憎しみが地下に潜む地震の破壊的なエネルギーに繋がる考えと見なされる。そして、さつきの憎しみを「石」に喩える一節がある。

生まれなかった子どものことを思った。彼女はその子どもを抹殺し、底のない井戸に投げ込んだのだ。そして彼女は一人の男を三十年にわたって憎み続けた。男が苦悶にもだえて死ぬことを求めた。(中略) あの男が私の心を石に変え、私の身体を石に変えたのだ。(p192)

「あの男」の死を望むさつきは身体が「石」になったのは、長年にわたって心に抱えて捨てられない憎しみからだと考えられる。タイに滞在中の最後の日、ニミットはさつきを連れて夢を予言するタイ人の老女を訪ねる。老女は以下のようにさつきに「石」のことを教える。

あなたの身体の中には石が入っていると彼女は言っています。白くて堅い石です。(中略) それは古いものなので、あなたはきっと長年にわたってそれを抱えて生きてきたのでしょうか。あなたはその石をどこかに捨てなくてはなりません。そうしないと死んで焼かれたあとにも、石だけ残ります。(p190)

身体の中に入った「石」は医学の角度から見ると、結石や癌を想起させるものである。しかし、さつきの「石」は身体的なものではなくて、人間の心につきまとう精神的なものである。「あの男」への積年の憎しみは、さつきの心の中で石のように固まっている。だが、「神の子どもたちはみな踊る」と同じように、「石」は決して永遠に不滅なものではない。タイ人の老女は次のように「石」と「蛇」を語る。

あなたは近いうちに、大きな蛇の出る夢を見るでしょう。壁の穴からそろそろと蛇が出てくる夢です。うろこだらけの緑色の蛇です。(中略) それをあなたの命だと思って、全力でつかみなさい。あなたの目が覚めるまでつかんでいるのです。その蛇があなたの石をのみこんでくれます。(p190)

大きくてうろこだらけの蛇は怖いイメージがあり、不吉な感じがするものである。しかし、老女によると、蛇は命の象徴という。全力で蛇をつかみなさいという老女の助言は怖いものに向き合うことで、生命の転機がつかめる暗喩だと考えられる。実はさつきはタイに来てまだ老女に会う前、以下のような夢をみる。

うさぎの夢を見た。短い夢だ。金網がはられた小屋の中で一匹のうさぎが震えている。時刻は真夜中で、うさぎは何かやってくるのを予感しているようだった。彼女ははじめのうちは外からそのうさぎを観察していたのだが、気がつくとな彼女自身がうさぎになっていた。彼女はその何かの姿を、暗闇の中にほのかに認めることができた。(p183)

夢でうさぎになったさつきが暗闇の中に感じたのは老女が言った緑色の蛇であろう。うさぎが蛇に感じるのは食い殺される恐怖だと思われる。蛇の口という暗くて狭い空間に飲み込まれる恐怖は、地震という圧倒的な暴力も連想される。うさぎが蛇に感じた恐怖は、人間が地震に感じた暴力に近いものだと思われる。こうして、「タイランド」における地下と心の底に潜む共通のエネルギーは、前述した暴力としての地震が家族の新生を促すことに一致していると考えられる。

最後に、五作目の「かえるくん、東京を救う」を見てみよう。阪神淡路大震災に関連する箇所は次の通りである。

彼は先月の神戸の地震によって、心地の良い深い眠りを唐突に破られたのです。そのことで彼は深い怒りに示唆された一つの啓示を得ました。そして、よし、それなら自分もこの東京の街で大きな地震をひき起こしてやろうと決心したのです。(p206)

東京に地震を起こそうとする彼というのは、みみずくんである。地下に棲んで地震まで引き起こせる巨大なみみずは決して実在の生物ではなく、何かの象徴に違いない。問題は、なぜみみずくんは地震を引き起こそうとすることかということである。それについて、以下の一節で説明される。

彼は普段はいつも長い眠りを貪っています。地底の闇と温もりの中で、何年も何十年もぶっつづけで眠りこけています。(中略)彼はただ、遠くからやってくる響きやふるえを身体に感じとり、ひとつひとつ吸収し、蓄積しているだけなのだと思います。そしてそれらの多くは何かしらの化学作用によって、憎しみというかたちに置き換えられます。(p205)

みみずくんは地下のエネルギーの象徴であろう。人間社会に破壊的な打撃をもたらす地震の根源的なエネルギーである。しかし、「彼のことを悪の権化だとみなしているわけでもありません」(p205)とのように、地震の暴力性は決して「悪」と同一視されない。みみずくんの暴走を阻止して東京を救うのはかえるくんの責務である。そして、東京の地震を阻止することができたかえるくんは次のように語る。

ぼくは純粋なかえるくんですが、それと同時にぼくは非かえるくんの世界を表象するものでも

あるんです（中略）ぼくの敵はぼく自身の中のぼくでもあります。ぼく自身の中には非ぼくがいます。（p218）

かえるくんは、自分の中に東京で地震を引き起こそうとした敵であるみみずくんの存在を感じる。つまり、地震の根元は自分の体の中にあるのである。かえるくんはみみずく人を倒して東京の地震を阻止したとしても、地震を起こす地下のエネルギーは消滅しない。「ずたずたにされてもみみずくんは死にません。彼はばらばらに分解するだけです」（p217）と言われるように、地下のエネルギーは再び集まって蓄積するのである。そして、他のところで地震を引き起こす機会を待つ。

虫たちは片桐の脚を這いのぼり、寝間着の中に入り、股のあいだに入り込んできた。小さな蛆虫やみみずが肛門や耳や鼻から体内に入ってきた。むかでたちが口をこじ開け、次々に中に潜り込んだ。（p220）

地下に棲むみみずは、片桐の体内に入り込む。それは地震のエネルギーが人間の内面に存在することを意味する場面だと考えられる。そして、「いったいどこまでが現実に行ったことで、どこからが妄想の領域に属することなのだろう」（p216）と「何が夢で何が現実なのか、その境界線を見定めることができなかった」（p220）とあるように、かえるくんは現実世界に存在するものか、片桐の心の中に潜む妄想か、定かではない。こうして、体中に地震の根元であるみみずく人を含めるかえるくんは片桐の心の表象に過ぎないと言えよう。

以上の三篇で共通するのは、地震という地下のエネルギーが人間の内部に結びつくことである。人間社会を壊滅させる地震のエネルギーは必ずしも「悪」とは限らず自然の一部に過ぎない。人間の心に秘められる力もそのようなものであろう。『約束された場所で』で反復される、オウム真理教に入信する人々の心の中に潜む負の力は、まさに善也やさつきが持つ心の「石」である。人間の心が人間社会を破壊する力になる可能性は十分あり得る。「神の子どもたちはみな踊る」が表題作とされたのは、地下鉄サリン事件との関連性が浮上するからだと言えよう。

4. おわりに

「暴力性」と「地下性」は阪神淡路大震災と地下鉄サリン事件を結ぶ要素と見なされる。1995年2月と設定される『神の子どもたちはみな踊る』はまさに二つの出来事を繋ぐ「暴力性」と「地下性」の表象である。地震の「暴力性」はただ社会を破壊するだけではない。新生の始まりを促す一面も合わせ持っている。それは地下鉄サリン事件が日本社会のシステムの不備を暴露して人々に反省を要請する点と同様である。

そして、「地下性」において地下のエネルギーは人間の意識の深層にこめる力に響き合っている。二つの力は同じように目の見えない「あちら側」で黙々と進んで社会に大きな打撃を与える阪神淡路大震災と地下鉄サリン事件となって現われたのである。自然のエネルギーは不可抗な出来事であるが、人間の心に潜む負の力は如何にして統御するのか、それはこれから村上春樹作品の一つの大きな命題になるのではないだろうか。

-
- 1) 村上春樹「解題」『村上春樹全作品1990～2000③ 短篇集Ⅱ』講談社（2003年）p268～269
 - 2) 同注1 p271
 - 3) 同注1 p270
 - 4) 村上春樹『境界・近境』新潮社（2000年）p288
 - 5) 村上春樹『村上春樹全作品1990～2000⑥ アンダーグラウンド』講談社（2003年）p662～663
 - 6) 松本常彦「地震の後で——彼女は何を見ていたのか——」『九大日文』第12巻（2008年）p119
 - 7) 同注6 p118
 - 8) 同注5 p770～671

「UFOが釧路に降りる」、「アイロンのある風景」、「神の子どもたちはみな踊る」、「タイランド」、「かえるくん、東京を救う」、「蜂蜜パイ」の本文の引用は『村上春樹全作品1990～2000③ 短篇集Ⅱ』（講談社、2003年）に拠った。

The “violence” and the “underground” in Haruki Murakami’s “after the quake”

Yeh ling

The “earthquake” of the book-title means “great Hanshin earthquake” which occurred on Tuesday, January 17, 1995. There are 6 stories in this novel. These 6 stories all happened on February, 1995. However, not happened in Kobe but far away from there. And, There was a big incident that called “Subway Sarin Incident” happened in Tokyo on March, 1995, which was perpetrated by members of Aum Shinrikyo. That means these 6 stories happened between the “Great Hanshin earthquake” and “Subway Sarin Incident”. Haruki Murakami connects these two matters by this novel. That means, there are two key-words of this novel. It’ s “violence” and “underground” .